
オデッサの激戦

自衛官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オデッサの激戦

【Nコード】

N6083M

【作者名】

自衛官

【あらすじ】

「レビル救出作戦」の正当な続編です。またもやあのスナイパーが登場します。

今回は、オデッサの作戦に駆り出されて……あいつが悪態をつきます。

プロローグ

人類が増えすぎた人口を

宇宙に移民させるようになって

すでに半世紀が経っていた。

地球の周りの巨大な人工都市は

人類の第二の故郷となり

人々はそこで子を産み、育て

そして死んでいった……。

宇宙世紀0079 1月3日

地球からもっとも遠い

宇宙都市サイド3はジオン公国を名乗り

地球連邦政府に独立戦争を挑んできた。

ジオン公国と連邦は

開戦からわずか一週間の戦いで、30億もの生命を死に至らしめた。

人々は自らの行為に恐怖した。

プロローグ（後書き）

この作品は「レベル救出作戦」の正当な続編です。

他で見かけたら、それは偽物ですので注意してください。

きっかけは、自分の作品を読み返してたら……ということなんです。自分で書いた内容を忘れてて、なかなか面白かったです。（笑）

それでは、これからよろしくお願いします。

第一話 移動

私は連邦軍に8つある特殊部隊のうちの1つである第6特殊部隊の副長だ。

歳は30、自分で言うのもなんだが、今までろくな人生を送ってこなかったこともあり、性格は捻じ曲がっている。だからこんな部隊にも抵抗なく入れたような気もするが。ちなみに階級は大尉だ。どんなふう捻じ曲がってるかって？

まず、人にやさしくない。人に同情しない。人を利用しようと考え。嫌いな人は任務にかこつけて殺しちゃう。自己中心的。自分さえ生きれば、後は死んでもいいと思ってる。どこぞの主人公のように、実は良い人、てことは全然ない。

こんなところかな？

ちなみに私の横にいるのは、この部隊の隊長。つまり、私の直属の上司ということになる。歳は35だ。

「隊長、何だか……負けてません？」

「そう言うな。陸軍だって必死で戦ってるんだ」

「でも、結果がこれじゃあ、健闘を讃えるにも限度がありますよ」

「否定はしないが」

私と隊長は、書類に目を通しながら言った。

その書類には、連邦軍がヨーロッパにあるオデッサ基地・北米大陸での戦闘で惨敗したことが書かれていた。オデッサ基地は、戦争をする為に必要な貴重な鉱物資源を採掘する基地だったが、ジオンのモビルスーツの前に完膚無きにまでやられた。また、北米大陸からは、南米にある連邦軍本部ジャブロー、つまり今私たちがいる所を攻撃することが可能で、ここも戦略的に取られてはいけなかったところだった。

「否定はしないが、時と場を考えてもいいだろう」

今私たちは、相変わらず薄暗い、連邦軍本部ジャブローの会議室で、偉そうな軍幹部を前にしている。隊長は、こいつらの前で言うなど言いたいようだが、残念ながら事実だ。

もの凄く機嫌が悪そうな偉いさんの1人が口を開いた。
どうやら陸軍軍人のようだ。

「そこで、この苦しい戦局を開戦するために、我が軍はオデッサ基地攻略を検討している。しかし、オデッサには核が配備されているとの情報がある。あるスパイからの情報で、信憑性が高い。数は2つ。そこで、君達の部隊には、その1つを破壊してもらう」

最悪だ……この感じを味わうのは2度目のような気がする。
またまた敵のど真ん中に飛び込め、てか？実は死んで欲しいだろ？何かしたか？謝らないけれど言ってみろ、場合によっては撃ち殺すかもしれないが。

「具体的には、真夜中に2台の兵員輸送車でオデッサに近づき、核関連施設を占拠・破壊してもらう。破壊には、高性能爆弾を使用する。破壊によって核兵器が爆発することはないと思われる」

「核兵器は、南極条約に違反するのでは？」

隊長が質問した。

ちなみに、南極条約というものは、ジオンと連邦が戦争初期に締結した戦時条約のことである。

本当は、連邦の事実上の降伏になるところだったが……これも前作を読み。

とにかく、その中には、核兵器の使用を禁止する、ともしるされている。

「残念ながら、確実な証拠がない為に、ジオンに正式に抗議することができない。しかし、もし使用されたら、敵味方を問わずに多くの被害が出る。使用した人間を軍事裁判で裁けても、被害を回復するには多くの時間と資金がかかる。それだけは避けねばならない。」

ごもつともな意見でございますねえ。

私と隊長は、会議室から出て廊下を歩きながら話した。

「隊長、聞きました？」

「何をだ？」

「爆発することはないと思われる、て何ですか？するかもしれない、てことですか？」

「大丈夫だと思うがな。」

「隊長が自分で、だと思う、て言ってるじゃないですか」

「何事も断定はできない、てことだ」

「前といい今回といい、帰ってくるかどうか賭けて遊んでんじやないだろな」

「どこからそんな想像が……」

部屋に戻った後に、自分の装備をチェックした。

チェックしながら、いつそのこと核兵器でジャブローの偉いさん方を吹き飛ばしてくれればいいと思った。それが無理なら、撃ち殺してもいい。どこでどうやって殺すか、逃走経路はどうするか、自分を偽って時効まで逃げ切るにはどうすればいいか、そんなことをシミュレーションしながら、装備のチェックに没頭した。

3日後に部隊は、輸送機でヨーロッパの最前線基地に飛んだ。

「隊長、この座席は堅いです。私の座つてるところだけが堅いのか、全てがそうなのか、どちらですか？」

「もちろん、後者だ」

「この作戦が成功したら、部隊専用機を造ってもらいましょう」

「無理だと思っぞ」

「私にいい案があります。ジャブローにこもっているゴップ將軍には敵が多いです。その敵対幹部と交渉して、ゴップ將軍を暗殺する代わりに、専用機を造ってもらいましょう」

「絶対にダメ」

「いいんですか？隊長がゴッブ將軍の悪口を言ってるテープを世に出しますよ」

「今すぐ外に放り投げろ、命令だ」

「絶対にダメです」

そんな無駄な会話をしているうちに、輸送機は着陸した。私達が降りてから暫くして、別の輸送機が着陸した。もう片方の核の破壊を命ぜられた部隊だろう。

「どこの部隊ですか？」

「何でも、第3特殊部隊の連中だそうだ」

「ああ、あの正義感が強い部隊ですね」

「まるで評判が悪いみたいに言っな。それを気に入ってる奴らも多いんだぞ」

「好きじゃなんですよ、自分の正義を何一つ疑わずに、本当の正義だと思ってるのは」

「お前らしいといえばお前らしいのかもしれないが……」

私が正義という言葉に敏感なのは、ミルの一件もあったのだが、隊長には言っていない。

私達は、前線に造られた簡素な作戦室に集められた。

もちろん、第3特殊部隊の連中でもある。

私と隊長は、あちらの隊長と挨拶をした。

「第6特殊部隊隊長のブルイ・ノエです。よろしくお願いします」

「第3特殊部隊隊長のセルル・ギイです。連邦の正義の為に、ジオンと戦いましょう」

「連邦」の正義ねえ……

作戦開始は明日の02:00。

つまり真夜中、私は作戦そっこのけで仮眠にはいった。

第一話 移動（後書き）

久しぶりの登場です。

これから頑張るので、よろしくお願いします。

第二話 発砲

私は真夜中に隊長に叩き起こされた。

非常に不満なことがいろいろあったが、仕方なく狙撃銃「S72R3」を用意した。

真夜中だというのに、部下を含めて、全員が兵員輸送車に乗りこむところだった。

さて、自分も乗るか、と思っていたら。

「お前は助手席に乗れ」

「なぜ？」

「俺の横にいないと、その狙撃銃で隣の兵員輸送車を撃ちそうだ」

「隊長、人の心を読むのは止めましょう」

「お前に人の心があつたとは、初めて知った」

「覚えておきましょう。テストに出ますよ」

部下の数人が笑いをこらえ、他の部下は笑うな笑うな、と言いながら兵員輸送車に乗りこんでいった。

ちなみに、連邦軍制式拳銃「M71A1」のサイレンサー付きや、最新の小銃「名無しのこんべい」に、暗視スコープ等々、奇襲作戦の為の装備が惜しげもなく使われる作戦であることから、上層部にとっても重要な作戦であることが分かる。

隊長の話によると、核はジオン軍の中ですら、嚴重に秘匿扱いされているようで、核施設は、オデッサ基地といっても、かなり辺境のところであり、近づいてもばれる心配がない。そんなもって、核施設の内部構造は、入口は2あり、中も2つに完全に仕切られているようで、片方ずつに同時突入し、破壊することだ。

説明を聞いて、何でそんな詳細なことまで分かるのか、と言いたくなったが、聞かずに助手席に乗った。聞いても教えてくれないだろうし、聞いたところで損にも得にもなりそうにないからだ。

さて、兵員輸送車が走り出して数時間かそこら経ってから、ようやく核施設が見えた。作戦としては、まず敵の施設の入口への突入準備を完了したら、私が丘から見張り役を狙撃して、敵が混乱した際に、隊長たちが火力重視の兵器で攻撃して、作戦スタート。そして、隊長達が出てくるまでの、出口の確保。前と同じ気がするが、まあいいだろう。

それと、第3特殊部隊の隊員にも、狙撃兵がいる。隊長に挨拶しとけとか言われたので、仕方なくしておくでしょう。

「第3特殊部隊所属の、カリ阿布・オル中尉です」

「よろしくお願いします」

外見は、ひよろひよろのやさ男だった。顔もそんな感じで、まさかあんなに強いとは思わなかった。

まあ、その話は後にするでしょう。

挨拶を手短に終わると、私は狙撃の準備をした。

狙撃銃を安定させ、狙いを出入り口に合わせたら、次はタバコを取

り出して、火をつけて……

「あれ、タバコ吸うんですか？」

隣のやさ男が話しかけてきた。

「いえ、吸いませんよ」

「え？でも、火を」

「ああ、これは風速と風向を調べるためです」

「はあ。でも、風を調べるなら、小型の機会があるじゃないですか」

確かに、こいつの言うとおり、便利な機械が発明された。小型で風速・風向きを調べられる。大概の兵士はそれを使っている。だが、私はどうも信用できない……年かな？

さて、作戦開始時間05:20とのことで、私は敵の配置を調べた。正面には5、6人の兵士がいた。こんな施設の任務についているからして、軍のエリートかもしれないが、その賢い頭にはもう直ぐ風穴が空くだろう。ご愁傷さま。

05:10になった。

隊長たちは物影に配置完了しころだろう。

こちらもいつでも撃てるようにしておくでしょう。

弾が入ってるか再確認したら、まずは腹這いになって、右目をスコップに密着させて、照準を入口に合わせて、準備完了。後はトリガーを引けばいつでも弾が出る。

暫くして時間を確認すると、作戦開始30秒前だった。

20秒前にトリガーに指をかけて、10秒間に照準を兵士の頭部に合わせて、残りの9秒はじっと待って、そして残り1秒でトリガーを引く。

小さな銃声がこだました。

第二話 発砲（後書き）

遅れてすいません、そして、遅れた割に短くてすいません。
これからも頑張って書いていきますので、お願いします。

第三話 絶命

見張りの2人が同時に頭に風穴を空けて倒れた。

1人は私が撃つたのであり、片方は隣にいるやつが撃つたんだろう。

他の見張りは直ぐに周りを見渡して、どこから撃たれたか知ろうと
していた。明らかに焦っている。

それと同時に隊長達の小銃が一斉に発射された。

手足やら胸やらに銃弾の雨を受けて、10秒程度で敵の見張りは全
滅した。

あんなに撃つたら施設から敵がぞろぞろと来るんじゃないかと思っ
たが、誰も出てこなかった。

隊長達は、扉は見張りの死体から抜き取った鍵によって、あっさり
と突破した。

何だか出来過ぎているが、作戦が順調に進んでいるし、問題は無い
だろう。

核施設の人員は、機密保持の為に少ないようで、私達の仕事も特に
無かった。

隊長達が施設に入って暫くして、裏口の人員が知らないが、それな
りの数の兵士が正面入り口に近づいて来たので、片っ端から頭を……
…と言いたいところだが、命中率優先で、胴体に次々と鉛を送りこん
だ。

心臓に当たって即死した者や、のたうち回って死ぬ者。

味方に駆け寄って、しゃがんだところで、そのまま味方の上に倒れ

こんで絶命する者。

さっさと入口に入ろうとして、隊長の隊が仕掛けたトラップによって爆死する者。

スコープの中に、色々の兵士の死に様が映し出されたが、1人だけやっかいなのがいた。

なぜかバズーカを持っていたのだ、そして相手を戦車と勘違いしたのか、それをこっちに向けてドン。

撃つてすぐに、隣の奴によって撃ち殺されたが、発射されたロケット弾は私達に近づいてきた。

だが、人相手に正確な狙いをつけれるわけでもなく、ロケット弾は私達をはずれて、遠くに並んで止めてあった、2台の車へ……え、車！？

直後に、爆音が響いた。

1台が爆発したのと同時に、隣に止めてあった車も爆発。

爆風やらなんやらが私達にきたが、車は離れていたなので、被害は無かった。

帰りは、後で味方の1人が背負っていた通信機が何かで連邦軍を呼べばいい。

何ら問題は……無いと思う。

同時刻：核施設内部

私達の隊は、殆ど敵のいない施設内を簡単に制圧。

核がある部屋の扉も、バズーカで吹っ飛ばして問題なし。

私は部下に核への爆弾の設置を指示した。

暫くして、爆弾の設置も完了し、後は外に出て遠隔操作で爆破させ

るだけ、と考え、この作戦の成功を確信した。

その瞬間、核施設内にけたたましい警報が鳴り響き、今頃警報を鳴らしても……と思う私の目に、外へと続く出口に、頑丈そうなシャッターが閉まっていく光景が飛び込んできた。それは、私達を核施設に閉じ込めた。シャッターが完全に閉まると、部屋の隅から、一目で毒ガスと分かる、気味の悪い色をしたガスが出てきた。

さて、どうしたものかねえ……

まずは、バズーカで扉を撃った。
頑丈な扉はびくともしなかった。どんだけ堅いので造ったんだ？

次は核に設置した爆弾を使って、と思ったが、部下の話によると、一度設置すると、取り外しが出来ないようだ。

しかし、私はこの施設に入る直前のことを思い出して、この作戦の成功を確信した。
あれ？さっきも同じような事を考えたような……まあ、良しとしよう。

同時刻：狙撃ポイント

「副長、聞こえるか？」

「出入り口のシャッターの隣に、真っ赤なボタンが見えるだろ？それを狙撃しろ。そいつは、シャッターを開けるボタンだ。直ぐにやれ」

「あー、すいまえん。たった今、手持ちの弾が1発になってしまい

ました。さらに、車が爆発して、車に積んでた弾薬が全部吹っ飛んじやったんですよ」

「1発あれば充分だろう」

「実はですね、隣の奴は残弾無しなんですよ。そんなもって、見ると、ボタンとシャッターは2つずつあるんですよね。片方は、隊長達の入っていったシャッター。もう片方は、隣の部隊です。そして、手持ちの弾は1発。今から私が全力疾走してボタンを押しても、かなり時間がかかります。その間に毒ガスで隊長達は死にます。つまり、どちらかの部隊しか助けられないんですよ」

「何言ってる？片方の部隊が外に出た後に、もう片方のボタンを押せばいいだけだろう」

「……それだと……つまらないじゃないですか……」

「は？」

「では、毒ガスがギリギリまで来たら言っして下さい。片方だけお助けするので」

「おい、ちょっと待てー!!」

そこまで話したところで、私の後ろに人の気配を感じた。いや、殺気ならずと感じていた。

「直ぐに撃つて下さい。じゃないとあなたを撃ちますよ」

私の後ろに立った男は、ひよろひよろのやさ男で、顔もそんな感じ

だった。

その男は、拳銃を私の頭に向けていた。ちなみに言っておくが、拳銃ではボタンまで届かないし、拳銃の弾を狙撃銃で撃つことも不可能だ。

「へー、同僚への思いやりの強い人ですねえ。あ、弾なら渡しませんよ。」

「では、撃ち殺す前に聞きます。なぜ、こんなバカなことを？」

「あなたの部隊が嫌いだから……それでは理由になりませんか？それと、撃つても無駄ですよ。私は弾を避けて、自分の拳銃で撃ち返せますから」

「銃口から1mも離れていない状況で何を言ってるんですか？では、避けてもらいましょうか……」

その瞬間、1人の狙撃兵の頭が吹っ飛んだ。

第三話 絶命（後書き）

うわー、ていう感じの話になってますねえ。
自分で書いてて怖いです。

感想等お待ちしております。

第四話 回想（前書き）

一応、言っておきます。
主人公は、男です。

第四話 回想

絶命した男は、ひよろひよろのやさ男で、顔は吹っ飛んで分からなかった。

「避けれる訳ねえだろう……アホかお前……」

作戦開始直前に、こいつの拳銃を壊しておいてよかった。
おかげで助かった。

拳銃を腰に戻したところで、隊長が、発砲の催促をしてきた。
ああ、何だか急にめんどくさくなった。
たまにある、全てがどうでもよくなる……

しかし、それでは任務を成功出来そうに無かったので、仕方なく、
ボタンを撃った。

隊長達が外に出て、生きてることを実感したころ、その横では、正義感のある30人程が死んだそうだ。
いったい誰のせいだろう。

それはもちろん、確認もせずに施設に入った人間でなく、自分自身
だということとは分かっている。

だから、隊長が凄く怒っていても何も驚かない。

軍法会議者だとか何とか言ってきたので

「いいんですか？隊長がゴッブ將軍の悪口を言ってるテープを世に出しますよ」

黙らせた。

さて、部下の1人が、爆弾を遠隔操作で爆発させると、施設の一部から、少しだけ新しい火の手が上がった。

あんなんで処分できたのかは知らないが、私にとってどうでもいい。どうせ核は1つ残っているんだし、あまり現状が変わった訳ではない。

帰りのへりの中にて、隊長が

「いくら嫌いだからって、殺すことは無いんじゃないか？」

と言ってきたので、嫌いだから殺しただけですと言っておいた。

「お前、人を大切に思うとか、そう、恋愛とかしたこと無いだろ」

「無いと言えば無いですし、あると言えばありますし」

「まあ、お前に限って絶対に無いな」

「そうでしょうね……」

隊長のせいで、記憶のタンスの裏に新聞紙に丸めてほかっておいた物が出てきてしまったようだ。

確かあれば、10年程前に、どこにも就職できない不況のせいで、仕方なく軍に入った直後だった。

当時から性格はあまり良く無かったが、今は隊長がいるように、その時も友人と呼べるような人は数人いた。

その中には、女性も1人いた。同期で同じ年で、名前は………忘れた。最初の印象は、気が強くて、いかにも軍に入りそうな活発な奴、くらいだったのは覚えている。

初めは、会ったら挨拶する程度だったが、何だかんだで、そいつとは気軽に話せる友人になった。

きっかけは、射撃訓練で隣になった時に、私の射撃の成績がそれなりに良かったので、それを話題にあちから話しかけてきたからだ。話しの内容は、軍や武器のことが主だったが、そいつは段々と、自分の家族や生まれの話などをするようになった。

私は、自分の育った悲惨な環境を他人に隠すようなことは無かった。だから、まだ私には話しやすかったのかもしれない。

なぜなら、私はその時も、自分ほろくな人生を歩んでない、と思っていたが、そんな私でも、相当なものだと思える内容だった。

しかも、いつもは気が強くて、性格をそのまま現したような顔をしてる奴が、明らかに気に病んでいるような顔をして話してきた。

あまり乗り気では無かったが、仕方なく、私も自分のことを詳しく話した。

そして、自分もそんなんだから、と同じ境遇であることを前置きして

「今さら育った環境のことで後悔しても仕方がないから、あまり落

ち込むな」

と言っておいた。

数日後、私は変な光景を見た。

家族や何やらの話をした相手が、狙撃銃の訓練をする時に、ポケットからタバコを取り出して、それに火を付けて、吸うのかと思ったら、直ぐに消してしまった。

あれは何の意味があるのかと聞いたら、風向・風力を調べていたと言った。

初めて、自分以外の人間を、変な奴だと思った。

それからさらに数日後、今度は自分の性格が、あまり気に入らない、などと話してきた。

いわゆる強がりで、本当は泣きたいくらい悲しい時や、誰かに助けてもらいたい時も、周りを巻き込んで、暗くなるようなことをしたなくて、無理に明るく振る舞ってしまう、らしい。

しかもあの、気に病んだような、落ち込んだような顔で話してきた。

今度も仕方なく、私は自分も性格が曲がっていると話してから、明るく振る舞えるだけ嘛だと言って、自分でも馬鹿だと思いながら

「それでも悲しい時は、女なんだし泣いても良いんじゃないか」

というようなことを少ない知識から、頑張って考えて言った。

するとそいつは突然、何にも気にせずに、前向きに生きていけるお前が羨ましいと言ってきた。

当時の私は焦った。まず、射撃以外で褒められたのが初めてだった。

無神経に育っただけだと言って、私は会話から逃げた。

それ以上、会話を継続させることが出来なかった。

そして、そいつの話は回数を増すことに、私では処理不可能な話題へと発展していった。

その度に私は、脳をフル回転させて、自信が無いながらも答えを出した。

だが、それ以外の、たわいもない会話の時間も増え、そいつは、私のブラックな冗談にもしつかりと返してくれた。

そんな仲になってから、半年以上が過ぎたころ、私は初めての長期休暇をどう過ごすか迷っていた。つまり、暇だったのだ。

休暇に入る1週間前になって、そいつは私が1人になったのを見計らったように近付いてきた。

今までは普通に話しかけてきたから、どうしたのかと思った。

「今度の休みだけど、その……せっかくだから、どっか行きたいなあ、と思ってるの」

「なら、行けばいいんじゃないか？」

「あ、いや、だから……1人で行くのも寂しくて」

「俺じゃないんだから、友人が何人もいるだろ」

「あいつら、全員が都合悪くて」

「他の部隊とローテーションしてるおかげで、うちの部隊全員が長期休暇に入るんだから、日程を組み合わせれば、どうにでもなるだろ」

「えっと……今のはやっぱ無し。本当は誰にも予定聞いてないの」

「お前、大丈夫か？熱でもあるのか？」

そこまで話したところで、そいつは段々と声が小さくなっていた。

しかし、次の言葉ははち切れんばかりの大声で言った。

「だ・か・ら！！他の奴はどうでもよくて、お前と行きたいの！！」

「……………は？」

「そういうことだ、分かったか！！」

見ると、彼女の顔は真っ赤だった。

私は心底困った。今まで人に好かれたことなんて無かったからだ。

「えっと……それが本気だったら縦に、冗談だったら横に首を振って」

私は最後の「冗談」という可能性を信じつつ、聞いてみた。

彼女は耳まで真っ赤にしながら、少しだけ、首を縦に振った。

はい、確定。

心の中で、そんな文字が流れた気がした。

「取り合えず、俺なんて止めとけ、性格は曲がってるし、無神経だし……」

人生で一番焦った声で、私は言葉を繋いだ。

しかし、彼女はまたも大声で言った。

「私の話しに優しく返してくれたせいして、何言ってるの!!」

「それは、あれだ……お前の顔を見てたら、つい答える気に……」

ここでふと、私は思った。そういえば、何で必死に考えて答えていたんだろう。

普段なら、面倒、の一言で片付けていただろうに。

それは、彼女の顔を見たら、何となく、仕方なく、答える気になった訳で……つまり……あれ？

断るつもりが、自分で断る理由を潰してしまったような気がした。

「分かった。で、どこ行きたいんだ？」

こうして私は、人生で初めて女と2人で出かけることになった。

その直後だった。私の部隊に、上からの緊急出動命令が下ったのは、命令内容は、急激に戦力を回復させつつある、テロ組織の大規模攻略作戦への参加だった。

正直、行きたくなかった。ここで死にたくは無かったからだ。

だが私は、あることを思い出した。彼女とは同じ班であることを。作戦行動を常にとともにするのだ。

急に、戦闘に集中できるか心配になった。

作戦当日、私達は暑い市街地にいた。

班長が部屋の扉を蹴破って突入し、直後に私達が突入して、何も無いか確認し、敵がいたら発砲し、1つずつ部屋を制圧していった。

私も彼女も、銃の扱いは慣れていて、問題は無かった。

だが、こんな危険な任務はさっさと終わらせて、帰りたいと思った。

しかし、そうもいかない事態が発生した。

いくつめか分からなくなっただけで入った部屋は、最悪だった。

敵がいた。
うじゃうじゃいた。

私達は発砲した。敵は次々と倒れていく。

だが、まだ撃たれていない敵は、直ぐに銃を取って発砲した。

1度だけ、体に衝撃が走った。

撃たれた。しかし、防弾チョッキのおかげで、命拾いした。

他の隊員も1度は防弾チョッキに、命を助けられたようだった。

そうして、その部屋の制圧が完了したところに、私達にロケット弾が撃ち込まれた。

私も他の隊員も、吹っ飛んだ。防弾チョッキは、役にたたなかった。

しかし、なぜだろう？私は生きていた。身体中が痛かったが、致命傷は負っていなかった。

直ぐに私は、ロケットランチャーを持っているやつに発砲した。

そいつは、ロケットランチャーを大事に抱えたまま死んだ。

次に班の隊員を探すと、既に皆が死んでいた。

しかし、彼女だけ見付からなかった。

もつとよく探してみると、遠く離れたところに、血まみれになって、

仰向けに倒れていた。

私は反射的に近寄ったが、彼女は、誰がどう見ても、もう助からない、深い傷を負っていた。

私はそつと、彼女を上半身だけ起こした。

彼女は私に気付くと、弱々しい口調で言った。

「悔しいな、もう、終わりが……デート、行きたかったな」

「そうだな」

「私、もう助から、ないでしょ？」

「ああ」

「なら、あなたの、銃で、私を……撃って」

「いいのか？」

「どこそ、野郎に、殺されるより、いいし……苦しみたくないの」

「でも、口が動く間に、何か言いたくないか？」

「じゃあ……お前、のことが、好き、だから……キス、して」

「いいよ」

今度は何も迷わなかったし、困らなかった。

私は戦場で、彼女と唇を重ねた。最初で最後のキスだった。

彼女はキスを終わると、涙を流した。

「キスは、嬉しい、けど、やっぱり、悔し、くて、悲しいな。ねえ、泣いても、いい、よね？」

「ああ、そう言ったら」

「あ、最後に、お前は、何と、しても、生き続けて……人生を、全う、して」

「分かった、約束する」

私はそう言った後に、彼女を優しく抱き締めた。

そして、拳銃を、一番苦しまずに死ねるところに向けた。

「それと、最後に、俺も、お前のこと好きだった……じゃあな」

「うん。バイ、バイ」

私は、最後は彼女と目を合わせながら、引き金を引いた。

「隊長、死んでください」

「は？」

「一番、かまっではいけない記憶をかまっした罰です」

「いや、意味分かんない。たまに思っけど、そんなことばかり言
つてて、人生つまらなくないか？」

「たまに思います」

「じゃあ、何で生きてるんだ？」

「さあ……いつか話すかも、いや、話さないでしょうね」

「おい、もっと意味わかんないぞ」

「じゃあ、一生分かんなくていいです」

「たく……お前は訳分からん」

隊長を適当にあしらいつつ、私は彼女のことを思い出していた。

第四話 回想（後書き）

読んで下さって、ありがとうございます。

感想等、お待ちしております。

第五話 捕縛

10年程前 ジャブローにて

「ねえ、私は、いつどこで死ぬんだろう」

「……」

「あ、深い意味は無いの。ただ、こんな仕事してるし、戦場で死んじゃうのかな、て思っただけ」

「まあ、軍人だしな。戦場が死に場所になる可能性は大きい。でも、そんなことを考えるのは、人生の無駄使いだろ」

「そりゃそうなんだけど、戦場で死ぬよりは、どんな生き方にせよ、寿命が尽きる最後まで生きたくない？」

「そうだな」

「私は、人生を全うして、出来るだけ沢山の人や物事にふれ合いたい。でもね、本当は怖い気もするの。次に会う人間が、私を傷つけるような人間だったらどうしよう、とか」

「生まれたところから不幸の連続なら、これからはもう少しましな人生が待ってる、て考えてもいいんじゃないか？それに、嫌な人間を知っていれば、他の人間に良く接することも出来るだろ」

「……それもそうね」

現代にて

ジャブローで起きた、とある殺人未遂事件から暫くして、連邦軍がジオンのオデッサ基地に進撃した。

結果だけ言うと、3日間の激戦の末、連邦軍はオデッサ基地の奪還に成功した。

噂によると、あの作戦で破壊出来なかった核が、ジオン軍によって発射されたが、連邦のガンダムが飛翔中の核ミサイルを破壊し、核爆発を防いだらしい。

よくやる。

敗北したジオン軍は、オデッサから撤退して行ったのだが、その中には、ジオン軍の情報を沢山持ったまま逃げようとしている奴もいる。

そんなのを黙って見過ごす訳もなく、撤退中のジオン軍幹部を捕まえよ、との命令が下った。

そして今、私達は山道を通るであろう1台の車を待ち伏せ中である。

こっちは30人に対して、相手は車に乗ってる数人、一気に取り囲めば、それで終わりだ。

と考えていたが、実際は面倒な作戦を取らなければいけない。

まず、よれよれのジオン軍の制服を着た私が、道の真ん中で手を振

って車を止める。

情報によると、その幹部は正義感が強くて、常に戦場の兵士の視点で考えてくれるので、部下から慕われているとのこと。

だから、そんな兵士を見たら、車から降りて近づいていくだろうと考えられる。

目標が出てきたところで、近づいて確保。

その直後に、森に隠れている味方が、護衛の兵士を片付ける、という作戦だ。

こんな作戦にする理由は、連邦軍情報部のお偉方が、こんな会話でもしたんだろう。

「ああ、特殊部隊の　さん、どうしたんですか？」

「実は、第3部隊が全滅してしまつて。しかも、味方に殺されたらしいんです。これが上にばれたら……この前のように、情報の改ざんをお願いします」

「分かりました。では、情報部で作つた、このジオン軍の偽制服を実際に使つて見てください。あなたの権限なら簡単でしょ？」

「ええ、安いもんです」

大体、こんな感じだろう。発信源が自分なら仕方がないか。

私は時計を見た。

まだか？

陽は沈み、辺りは暗い。道の真ん中にいたら轢かれるんじゃないか
と思いながら、車を待った。

暫くして、車の音が近づいてきた。血のりで赤く塗った箇所を気遣
うように立ち、手を振った。

車はライトを点けていなかったが、私に気づいたらしく、止まった。

後部座席から、3人の男が出てきた。

2人はただの兵士だが、1人は写真で見た幹部だった。

50代程度の男で、軍人らしい顔つきをしていた。

「自分は第1師団第4歩兵部隊所属の、ミル・ナイキ伍長です。味
方から、はぐれてしまつて……」

予定通り、嘘八百を並べながら、男に手が届くところまで近づいて
行った。

しかし、車から出た直後は、あわれむような目で見ていた幹部の目
が、私の台詞を聞いて、豹変した。

「第4部隊は、1人残らず全滅した。死体も確認した……撃て」

横にいた兵士の銃口が、こちらを向いた。

おい、この台詞を言え、て言ったのは、情報部の奴らだよな……後で爆弾配送してやる！！

私は、可能な限りの速さで、目標に飛びかかり、地面に押さえた。

直後に銃弾が真上を飛び、2人の兵士や運転手を貫いた。

何とか成功した。

そう思った1秒後に、男は力づくで私を押し退けて、逆に私を押さえて、首を閉めてきた。

おじさんだと思っていたが、中々の運動神経だ。

しかし、そう簡単に殺されては「人生を全うした」とは言えそうにないので、靴の爪先に仕込んである刃で、男の足を刺した。

そして、のたうち回っているところを、森から出てきた味方と拘束した。

「驚いたな、あの状況で抵抗するなんて」

「そうですね。あんまり賢く無いんじゃないですか？」

「あの状況を見ていたら、そのまま窒息させろ、と思う人もいたんじゃないか？」

「残念ながら、おじさんに殺られる程、バカではないですよ。それに、殺したい人間がいるなら、自分で殺さない」と

「後半の言葉についてはノーコメントだ。それにしても、靴に刃が
仕込んであるなんて知らなかったぞ」

「命を狙われる可能性は、普通の人よりも高くなる生き方をしてる
ので」

「誰かの復讐によってか？」

「そうかもしれないね……」

第五話 捕縛（後書き）

読んで下さって、ありがとうございます。

感想・評価等お待ちしております。

第六話 復讐

30人殺害事件……では無く、核兵器破壊作戦が終わって、ジャブローに帰った直後のことだ。

私は、真夜中に外の自販機で飲み物を買っていた。

すると、6時方向に人の気配を感じ取った。

小さいが、位置を少しずつずらす足音が聞こえる。

また、同じ方向から殺気も感じ取れた。しかも、かなり大きい。

さて、この状況から考えて、殺気の主は、私の命を狙う者だろう。

その結論に達してから数秒後に、殺気ともに少女が駆けて来た。

その手にナイフを持って。

ああ、面倒だ。

私は軽く少女を避けて、みぞおちに一発入れた。

少女は簡単に気絶した。

さて、こいつをどうしようかな……

今、私の向かいの椅子に、長い黒髪を垂らして気絶したまま、1人の少女が座っている。

暫くして、少女は目を覚ますと、まず私にこう言った。

「ここはどこ？」

「ジャブローの寮のロビーだ。ナイフは預かってるよ。どうやってジャブローに入ったのか聞きたいけれど、まず、君は誰だい？」

「私の名前はウルトリクス・ナミ。この苗字に、聞き覚えがあるでしょ。」

「残念ながら、全くありません」

「とぼけないで、私は、あなたに殺された、パテル・ナミの娘よ。だから、父の敵を取るために殺しに来たの」

「復讐とは、勇ましいねえ。でも、武器を持っていないこの状況では、私を殺せないだろうし、出来れば、父親についてもうちよつと詳しく話してくれる」

少女は一瞬迷ったようだが、直ぐに話し始めた。

「大好きで、母さんが死んでからの唯一の家族だった。でも、2年前に殺された。だから、私は2年間かけて調べた。そして、遂に犯人があなただと突き止めたの」

「よく調べたな。2年前……ああ、あれか、あれはな……」

「任務で仕方がなかった、とか言いたいのか？」

「いや、紛れもなく私が殺した。正当防衛とかでもない、確実に殺人罪だ」

「何で殺したの？」

「いちいち覚えて無いよ。それより、君は若そうだが、何歳だい？」

「17だけど」

「あまり、若い時間を復讐に費やすのは、お勧めしないな」

「諸悪の根元のくせに」

「まあ、確かに、私に言う権利は無かったな。それで、時間と体力を費やしてまで、私を殺すつもりかい？」

「そうよ」

「そんな君を、私が黙って見過ごすと思うか？」

私の問いに、少女は沈黙した。しかし、10秒程が過ぎると、小さ

な声で答えた。

「……父さんみたいに殺すつもり？」

どうやら、ただのバカではないようだ。

「ご名答。それが最も簡単に復讐を止められる」

私はそう言いながら、少女に銃口を向けた。

この姿勢から、少女が反撃するのは不可能だ。

発砲すれば少女を確実に葬れる。

「2度としないと謝れば、命だけは助けてもいいが」

銃口を向けられても変わらなかった少女の目つきが、一気に鋭くなり

「誰がお前なんかに!!」

と、恨みのこもった声で叫んだ。

「あ、そう」

私は引き金を引いた。

「なんて、弾は入ってないよ」

相手が大人だったら撃ってたかもな、などと思いながら、私は冗談ぽく言った。

だが、私の言葉を聞いても、少女は目を閉じて震えていた。

たく、子供が無理するからだ。さて、これに懲りて諦めてくれると嬉しいんだが。

「でも、次に銃口を向ける時は、弾が入ってるかもしれない。それでも、私を狙うのかい？復讐のことなんて忘れて生きていくことをお勧めするんだが」

「最低……殺す、絶体に殺す。そんな脅しなんかに乗らないわ」

ああ、びびって帰ってくれば楽なのに、これは相当恨まれてるな。

仕方ない……

「まあ、そこまで言うなら止めないよ。やりたいように殺しに来ればいい。私は君に命を狙われるくらいのことをしただろうしね」

少女は意外そうな顔で私を見た。

「こついつのはどうだい？私は再度君に銃口を向けないし、君は何度でも殺しに来てもいいが、復讐が3年後も完了できなかったら、君は諦める」

「何それ？」

「取り引きだよ。正直に言って、君を殺すのは簡単だが、それはしないから、3年で諦めてくれ、てことだ」

「何でそんなこと言うの」

「理由なんて話してると、気が変わるかもしれないけど、どうする？」

少女は暫く考えていたようだが、やがて、こつ言った。

「いいわ。3年の間に絶体に殺してやる！-」

「いいのか？あんな約束して」

少女がジャブローのどこかに帰り、ロビーに静けさが戻ったところに、隊長が現れた。

「拳銃を出せば、びびって帰ると思ったんですけどね。まあ、いいんです。3年もすれば飽きますよ」

「でも、意外だな。今までは相手が誰であろうと、外の密林に埋めたり、他言したら拘置所ごと爆破して殺す、とか言って警察に連れてったのに」

隊長は暫く考えてから、再び話し始めた。

「なあ、拳銃で脅すのも、あの約束も、結局は復讐を諦めさせようとしてないか？しかも、お前にしてはかなり平和的に」

「気紛れですよ」

言える訳ないだろ、彼女に似てたから、なんてな……

第六話 復讐（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6083m/>

オデッサの激戦

2010年11月26日10時07分発行